

---

# **全てが変わってもお前が愛おしい。**

黒渕 めかね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

全てが変わつてもお前が愛おしい。

### 【Zコード】

Z9853U

### 【作者名】

黒渕 めかね

### 【あらすじ】

とある王国の王と王妃。二人はとても深い愛と絆で結ばれていた。そして死が一人を分かつとき、王妃を失った王は壊れてしまった。それからも永遠と続く転生という名の地獄。精神的に酷く衰弱した彼らはやがて探し求めていた王妃の魂を持つ者を見つける。しかし……？　「やめてわたしは王妃じゃない。そのはずなのに……この気持ちはわたしのもの？それとも彼女のもの？…お願い。【わたし】を見て。

## 白い花弁が一枚

先の見えない真っ白な空間。

そこに一人の男が居た。

男の名前はない。

ただ自分の上司からは、【世界管理者】<sup>スメロテ</sup>と呼ばれている。

スメロテは170センチほどの身の丈を、スッポリと覆つてしまつローブを着ていた。

長つたらしい漆黒のローブは真っ白な空間によく映える。

スメロテはキラキラと白銀色に輝く長い杖を自分の肩に寄りかからせて、胡坐をかけて座っていた。

ふと、スメロテはあくびをする。

ふわああ、と大きく口を開け、垂れ目<sup>スメロテ</sup>の端が湿る。

ローブの端から僅かに飛び出る白銀色の猫つ毛が柔らかく揺れた。

スメロテは退屈していた。

数多くの世界を管理しているが最近はほとんど仕事が無い。

各世界の四季を調整する大仕事が終わったからだ。

まったくこの仕事は忙しさの波が激しい。と、スメロテは思つ。

忙しいときはいくら神に近い身体をもつてしても、這つて力を振り絞らないといけないくらい忙しいのに……

全てを包みこむような優しい笑顔で、鬼畜な無理難題を押し付ける

上司の顔を思い浮かべ、スメロテは背筋を寒くさせた。

—— そのとおり。

「……ん?」

スーっと薄紫色の瞳が細まる。

自分が管理する、とある世界の小さな違和感。

その違和感は本当に小さくて小さくて、今のような何もしていない状態じゃなかつたら気づきもしなかつただろう。

今にも消えてしまいそうなその存在は、か細く小さく世界の狭間に漂っているらしく。

「おこいで」

このままだと世界に溶け込んでしまいそうなほどか弱い存在を、スマレロテは自らの念で優しくそっと包みこみ、壊れてしまわないよう注意しながらゆっくりとその存在をスマレロテがいる真っ白な空間に転送させた。

薄紫色のスマレロテの念で保護されたその存在は、苦しそうにチカチカと淡い光を点滅させていく。

スマレロテはそつと優しく自分の両手に乗せ、正体を確かめるために存在を覗き込む。

「おおおや、これは……いや、キミは……」

球状にスマレロテの念で包まれたその存在は小さくてわかりにくいが、どうやら魂のようだ。

「珍しいねえ。キミはまだ生きてるのに、ここまで魂を損傷させ

るなんて」

労わるよりこそっと撫でながら、消えてしまわないよつて念で癒す。普通、ここまで魂が損傷することは無い。

こんなにも損傷した理由があるとすれば、魔術等の対価に魂といつ器が耐え切れなかつたなどといつ理由くらいだ。

しかし、この魂が漂つていたのは科学が発達した世界で魔術は一切無いはずだ。

「……しかも、…………どうしてそんなに悲しんでいるんだい？」

魂に触れたときから流れ込んだ悲哀の感情。

ただの魂では思つことなど無いよつな、深くて暗い悲しみの悲鳴。その思いの強さは、わきまで消えてしまつた様子からは想像できないくらい強く激しい。

「覗かせておくれ

優しいスメロテの声に呼応するよつて、3回チカチカと点滅した魂から眩しくて激しきくらいに強い光が飛び出てスメロテを包み込む。

スメロテの影ができた途端に薄く伸び、搔き消えた。

そしてそのまま黄金色の光は由き世界を照らしこんだ。



## 薄桃の花弁が一枚

『特別な力なんて持つてない。

だけど、貴方を守ることはできる。

貴方を愛し続けることはできる。

貴方と幸せをつくりていけることはできる。

だけど、貴方がいないと本当に俺は何も無いただの男だ。

だからお願いです。

どうか俺に、貴方という力の源をください。

貴方という生涯大切な存在を、どうかこの俺に…』

ぱたりと手にしていた本を閉じる。ほんの少し勢いがあつたせいか、ふわりと香ってきた紙の匂いを感じると共に肩ほどある自分の真っ黒な髪が揺れた。

先程まで読んでいた本のタイトルは『貴方を愛す』…その名の通り、純愛が本になつたようなベタな恋愛小説だ。洋風異世界の町娘と王國騎士とのラブストーリーで今一番人気な小説なのだと、この本を押し付けてきたこらと逃げていった友人が語っていた。

——まあ、ひまつぶしにはちょうどよかつたかな。

閉じた本を机の横にぶら下がっている紺色のカバンに放り込む。もはや放課後の教室にはわたし一人しかいない。

「おーすまねえな安藤。放課後まで残つてもらつてしまつて  
「いえ。お氣になさらず」

タイミングよくガラリと教室に入ってきたあまり反省の色が見えない先生に、椅子から腰を上げる。

—— 愛なんて、こんなに綺麗なモノじゃない

「失礼します」

ノックをするが反応が無かつたため、一応一言かけてから保健室に入る。

：よかつた。保険医の春風はるかぜ刃先生やいばはないようだ。  
あの先生は確かに良いヒトらしいが、遠くから見てもいつも女の子に囲まれている。

外見・性格・家柄すべてよし。という完璧人間がモテないはずがないが、あの女子集団のまん前で話しかけるなんて面倒なことはしたくない。

第一、あの保険医にはよっぽどのけが人で無い限りファンクラブしか近づいてはいけないという馬鹿らしい規則のせいで話すどころか近づくことさえ出来ない。

面倒なことだ、…だけど、彼女達は真剣に恋をしている。どうことはわかる。

ここはいわゆる、お嬢様・お坊ちゃんが集まる金持ち学校。この学び舎からでれば到底自由な恋愛などできないだろう。だからこの一時だけでも…と思つた結果が親衛隊なのだろう。

しかも此処にはあの春風先生以外にも、同じくトップクラスの美男・美女が生徒会にいる。

噂によると、一番人気は生徒会長の黒峰くろみね瑠架らしい。

——ん…?この香りは……

白いデスクに預かった書類を置いて帰ろうとしたとき、フワリと鼻腔をくすぐる甘くて上品な香りに思わず立ち止まる。匂いの元は、

少しだけあいた窓ガラスの脇においてある壺わづな花瓶の中。

引き寄せられたように、その紅あかに近づく。

そつと手を伸ばすと、薄い花弁から縄のよつて滑る手触りがした。

綺麗な、見事な、美しい、大輪の、真っ赤な、

「薔薇…」

ああ、綺麗。

あの全国の少女が読んできやあきやあ騒いでるあの一冊の本より、この白い寝城にたたずむこの一輪のほつがはるかに、価値があると思つ。

顔を近づけ、胸いっぱいにその香りを吸い込み、そつと目を閉じて匂いを感じる。

——何故か、なつかしい気持ちになった。

「…失礼しました」

帰ろつ。この部屋の主が帰つてくる前に。

ドアを閉めて長い渡り廊下を歩く。  
脳内を占めるのは、あの、強烈な紅あかだつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9853u/>

全てが変わってもお前が愛おしい。

2011年9月23日13時22分発行